

The Billy Elliot Times

VOL.1 @THE BILLY ELLIOT TIMES TOKYO, JAPAN. DECEMBER 1, 2016 FREE

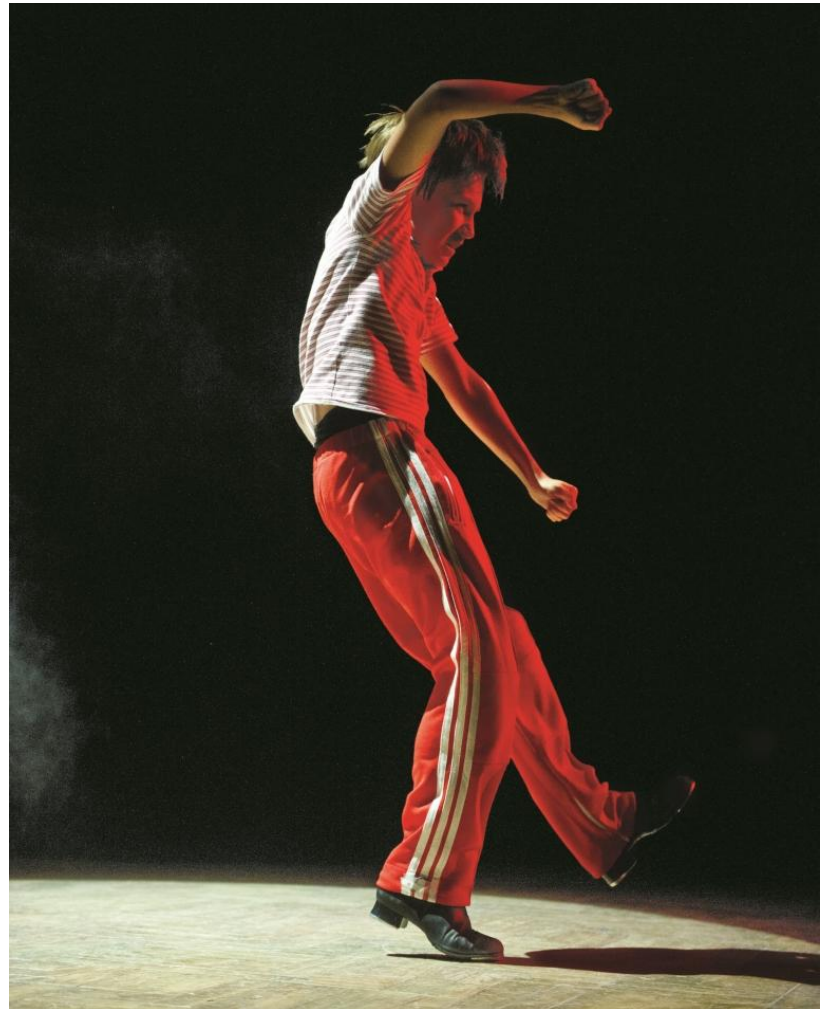
「ビリー・エリオット」、待望の日本語版上演へ！

2005年5月、世界屈指の劇場街であるロンドンはウエストエンドにて、その後世界を席卷することになる大作ミュージカルが産声を上げました。その名は、『ビリー・エリオット』。2000年に製作され、『リトル・ダンサー』の邦題で日本でも大ヒットした同名映画が、監督を務めたスティーヴン・ダルドリー自身の演出と、エルトン・ジョンの音楽によって舞台化された作品です。ロンドンで11年に渡るロングランを達成したほか、ミュージカルの聖地ブロードウェイやオーストラリア、韓国などでも上演され、全世界で80以上の演劇賞を獲得してきた本作。2014年には、上演10周年を記念してロンドンの劇場でライブ収録された映像が日本の映画館でも公開され、ミュージカルファンに大きな感動を与えました。

そんな、「待望の」という言葉がこれ以上ないほどふさわしい『ビリー・エリオット』日本語版が、2017年夏、ついに現実のものとなります。この作品は、バレエに魅せられた少年ビリーがプロのダンサーを目指す物語ではありますが、決して単なるサクセスストーリーではありません。ストライキに揺れる炭鉱の町で、幼いころに母を亡くし、炭鉱労働者の父と兄、そして認知症気味の祖母と暮らすビリー。彼と家族や町の人々との間には、きれいごとでは済まされない様々な思いがあり、それらを全て背負って追うからこそ、ビリーの夢は胸を打つのです。そうした葛藤や絆が丁寧に描かれていくだけに、これはまさに、母国語で観てこそいっそう深く心に染み入る作品と言えるでしょう。

STORY

1984年、イギリス北部の炭鉱の町ダラム。11才の少年ビリーは、ある日偶然バレエ教室のレッスンを目にし、心を奪われる。彼に才能を見出したウィルキンソン先生のもと、名門バレエ学校入学を目指して特訓を開始するビリー。彼の夢はやがて、家族全員の、そして町全体の夢となっていく――。



Pictures from the London cast of Billy Elliot the Musical

日本語版上演にあたって、最大の難関は、主人公ビリーを演じられる少年を見つけることでした。その難関をクリアすべく、上演の1年半前にあたる2015年末から始まったのが、過去に例を見ない大々的なオーディション。バレエ、タップ、アクロバット、歌、芝居の全てができる少年を育てるべく、オーディションは既に着々と進んでいます。果たして初代和製ビリーに選ばれるのは誰なのか、そして、気になる大人キャストの行方は…？ 「ビリー・エリオット・タイムズ」では、『ビリー・エリオット〜リトル・ダンサー〜』日本初演の製作現場から、最新情報を随時お届けしていきます！

「中間レッスン」に全国からビリー&マイケルが集合

大々的なオーディションは日本独自の試みではなく、主人公ビリーとその親友マイケル役は、1年以上かけて選考・育成されるのが通例です。日本での募集が開始されたのは2015年11月のことで、翌年3月の締め切りまでに集まった応募は1346通。その中から書類審査と、海外スタッフも立ち会った第2・3次審査を経て、現在候補者は各役7人にまで絞り込まれています。12月の最終審査に向けて、普段は各自、地元でレッスンを重ねている14人。そんな彼らが一堂に会してレッスンを受ける「中間チェック」が、10月に都内で開催されました。



3次と最終審査のちょうど真ん中にあたる日に行われる「中間チェック」の目的は、レッスンの様子を映像に収め、海外スタッフに見てもらふこと。日本側コーチ陣によるコメントも添えて送られるとあって、14人は成績表をつけられるような緊張の面持ち…かと思いきや、なんとも楽しそう！聞けば、ビリー役候補とマイケル役候補が全員集合する機会はなかなかないため、みんなこの日を心待ちにしていたのだとか。オーディションというよりもまるでスクールのような雰囲気の中で、未来のスターたちは日々、のびのびとレッスンに励みながら成長を続けています。

SCOOP!

ビリー役候補7名、『ラ・バヤデール』を観劇！



バレエのレッスンを担当してくれている伊坂文月さんが主演する、Kバレエカンパニーの公演を観に行った7人。「先生、天才ですね!」と大興奮!

(写真後列左より:栗山廉、浅野真由香、伊坂文月、白石あゆ美)

ミュージカル『ビリー・エリオット〜リトル・ダンサー〜』

2017年 7月中旬～10月上旬:TBS赤坂ACTシアター

10月中旬～11月上旬:梅田芸術劇場メインシアター

Column

深掘りキーワード ①

エルトン・ジョン

良い映画が必ずしも良い舞台になるとは限らない中で、『ビリー・エリオット』のミュージカル化が成功した大きな要因として、エルトン・ジョンが音楽を手がけたことが挙げられます。ポップス界のアーティストが作るミュージカル音楽は、キャッチーさは抜群でもドラマ性に欠けることが少なくないものですが、本作の音楽はもはやドラマそのもの。登場人物の心の機微を余すところなく表した歌はもちろん、ビリーが才能を開花させるダンスシーンなどの楽曲にも、ゾクゾクするようなメロディーが満載です。映画を観て、ビリーの姿に自身の幼いころを重ねて涙したというエルトン・ジョン。舞台を観たら、彼と作品との出会いに、誰もが感謝したくなるに違いありません。